

\* これは実際の試験問題ではありません。  
(This is NOT the actual test.)

No.000001

受験番号					
------	--	--	--	--	--

学習能力考査

人 文 科 学

資料及び問題

指示

係りの指示があるまでは絶対に中を開けないこと

1. この考査は、資料を読んで、あなたがその内容をどの程度理解し、分析し、また総合的に判断することができたかを調べるためのものです。
2. この冊子は前半が資料で、後半に 40 の問い(1-40)があります。
3. 考査時間は、「考査はじめ」の合図があつてから正味 70 分です。資料を読む時間と解答を書く時間の区切りはありませんから、あわせて 70 分をどう使うかは自由です。
4. 解答のしかたは、問題の前に指示してあります答えが指示どおりでない、たとえそれが正解であっても無効になりますから、解答の仕方をよく理解してから始めてください。
5. 答えはすべて、この冊子といっしょに配られる解答用カードの定められたところに、指示どおりに鉛筆を用いて書きいれてください。一度書いた答えを訂正するには、消しゴムできれに消してから、あらためて正しい答えを書いてください。
6. もしなにか書く必要があるときは、必ずこの冊子の余白を用い、解答用カードには絶対に書き入れないでください。この冊子以外の紙の使用は許されません。
7. 「考査やめ」の合図があつたらただちにやめて、この冊子と解答用カードとを係りが集め終わるまで待ってください。集める前に退場したり用紙をもちだすことは、絶対に許されません。
8. 指示について質問があるときは、係りに聞いてください。ただし資料と問題の内容に関する質問はいっさい受けません。

「受験番号」を解答用カードの定められたところに忘れずに書き入れること

アーネスト F. フェノロサ Ernest Francisco Fenolosa (1853–1908) が、経済学と哲学の教授として東京帝国大学で教鞭を執るために初めて来日したのは、明治 11 年のことである。それは大森貝塚の発掘で有名なエドワード S.モース (1838–1925)の推薦によるものであったという。モースは東海岸メイン州の出身で、ハーヴァード大学で腕足類の研究に携わり、資料収集のために日本を訪れたところを招かれて、前の年から同じ東京帝国大学で動物学の講義を受け持っていた。一方フェノロサはマサチューセッツ州セーラムの生まれで、スペインのバレンシアから移住してきた祖先の血を受け継いでいたが、ハーヴァード大学で哲学を学んだ後、卒業後ボストン美術館に付属する学校で絵画を勉強し、父親からは音楽の手ほどきを受けるなど、幅広い経験を積み、好奇心満々の 25 歳の青年として、異国の地にやって来たわけである。

やがてフェノロサは大学で倫理学を講じるようにもなったが、彼自身の興味は初めから日本の伝統的な芸術に向けられていた。まず最初に日本美術に魅せられて、機会あるごとに社寺や旧家の宝物を調査して歩いた。狩野芳崖や橋本雅邦などの優れた芸術家を見出して、その活動を支援したりもした。明治 15 年には洋画を排斥し、日本画を擁護する講演を行い、多大の反響をよんだこともある。そのようなフェノロサの遺稿を、後に編集することとなったエズラ W. L.パウンドは、次のように語っている。

[フェノロサは、] 日本人の誰もが耳にしたこともなかった財宝を、地中から掘り起こしたのであった。彼が日本のために日本芸術を保全したと言うのは、言い過ぎであろう。しかし誰かが母国の芸術を正当な優位に置いて、ヨーロッパの猿まねを止めさせる必要があった。それを彼が十分に為しとげたことは、確かである。

東京帝国大学におけるフェノロサの弟子のひとりに岡倉天心がいた。明治 10 年に文学部に入學した彼は、主に政治学を学んでいたが、フェノロサに出会い、その研究を手伝うようになったことが、その生涯の進路を決定づけることとなった。フェノロサはやがて大学を辞して、文部省と宮内省の美術調査嘱託となり、天心も文部省に出仕して、図画教育調査会委員として古美術調査に携わるようになる。明治 17 年にフェノロサは天心らとともに鑑画会を興し、新しい日本画の創造を提唱している。そしてその 2 年後、政府は師弟二人を一年間にわたって欧米に派遣し、官立の美術学校を設立するための準備にあたらせた。実はそれに先立つ明治 9 年、日本最初の官立美術学校として、工部省管轄下に工部美術学校が創立されたものの、6 年後には閉校となったいきさつがある。今回は政府も慎重を期して、フェノロサ師弟の視察を参考に、明治 22 年、新しい官立の美術学校を、上野の山に発足させることとなる。それが今日の東京芸術大学美術学部の前身である東京美術学校であり、発足の翌年、天心はその校長に就任することとなる。

一方フェノロサは、発足当時の東京美術学校において美術史を担当したが、1890年にボストン美術館に東洋美術部が新設された際にその主幹 (curator) として招聘され、故郷に帰ることとなる。その彼の努力もあってボストン美術館は、最も優れた日本美術のコレクションを有することで国際的に知られるようにもなった。しかしフェノロサ自身にとっては、日本が第二の故郷であり、本来の故郷以上に心の「ふるさと」となっていた。そこでボストン美術館の仕事が一段落したところで、その職を辞して、日本へ戻って来た。明治29年のことである。

ところがそのフェノロサを迎える日本の態度は、極めて冷たいものであった。かつての弟子であり、協力者でもあった天心とも仲違いをして、手の裏を返すような旧知の人々の冷淡な態度にあうこととなったのである。一応の体制を、日本人の手によって整えつつあった明治の美術界は、もはやフェノロサを必要としなくなっていたのである。

それを見兼ねて助けの手を出したのが、8年前に九段富士見町に自分の道場を開き、この年東京高等師範学校の校長となったばかりの嘉納治五郎であった。嘉納はフェノロサを師範学校の英文学講師に起用し、その介添役として、新しく赴任してきた若き日の英文学者平田禿木をつける。そして程なく、その禿木を伴って、明治期の能楽復興の中心的存在と言える梅若実の許に、稽古を受けに通うフェノロサの姿が見られるようになった。

フェノロサがいつ頃、どのような機会に初めて能に接したかは明らかでない。恐らく明治39年頃のものと思われる彼の遺稿の中で、「この二十年来わたしは梅若実とその息子たちの個人教授の下で、謡の方法や舞のことの何がしかやらを実習によって学びつつ、能を研究している」と述べているが、それを文字通り正確と受け取るならば、彼は一時帰国以前にすでに能と出会い、梅若実に師事していたことになる。ただし彼が本腰を入れて能を習い、その研究に没頭したのは、禿木を伴って定期的に稽古に通うようになって以後のことと推察される。しかもその熱の入れようが尋常ではなかったことは、彼の観能に随伴した禿木が、「月一回の梅若の能へも、特に舞台正面前へ席を取って欠かさず出かけたが、多くの観客のうちに、あれ程真剣な態度で自分の技を見てくれる者はないと、実翁も言っていた」と、証言していることから分かる。

フェノロサは、梅若実から稽古を受けるばかりではなく、かなり広い範囲の芸術論を語り合ったこともあるらしい。時には日本の芸術ばかりではなく、欧米の演劇や歌劇にまで話題が及んだことさえあった。例えば明治31年12月20日の日記には、「梅若老を平田氏と訪問」したとあって、次のような文が記されている。

話のついでに私はギリシャ劇について簡単な説明などもした。彼はオペラについては既にある程度知っていた。能の長所は情感にあるので、筋や外形にあるのではないと彼は言った。だから劇場にあるようなアクセサリはないのである。「魂」というのが彼の用いた言葉であった。純粋な精神が能の場であればこそ、それは他の芸術より高級である。

能とギリシャ劇を比較して論じるのは、すでにこの頃から盛んとなっていて、フェノロサもその例外ではなかった。未発表のままとなっていた能に関する彼の著作を、後になってまとめ上げ、出版したのは、アイダホ生まれの詩人エズラ W. L. パウンド (1885-1972) であったが、その中に含まれたフェノロサの語録の中には、能が西洋に対する「新たな生命を吹き込む力」となることを予言するような記述が含まれ、さらに次のような記述が見られる。

アテネの古代ギリシャ劇と同じように古風で、同じように強烈で、殆ど等しく美しい劇の一形式が、未だに世界に存在している。だがそれを愛する者も識る者も殆どない。

事実、彼がこの文を記したと思われる時期は、伝統ある能楽の低迷期に当たっていた。しかしパウンドによれば、「能はフェノロサがこれを書いて以来、広く知られるようになった」という。

フェノロサは能とギリシャ劇を比較するにあたって、まずその共通点を挙げている。すなわち両者は共に奉納用の舞踊であり、合唱を用い、音楽中心の仮面劇である、としている。しかし両者は根本的な点で異なっている。特に能『高砂』のように、主役であるシテが神格的性格を持ち、劇後半の神舞にそのクライマックスが置かれるような例は、ギリシャの神々の世界とは全く異なる次元のものである。そこで彼は「古代的抒情詩劇」としての能を次のように説明する。

[能においては] 神自身がその面を仮面で隠して舞踊した。ここにギリシャ劇と日本劇との起源における一つの相異がある。ギリシャでは合唱隊達が舞踊し、神は神壇によって現わされた。日本では神が一人で舞踊したのである。

フェノロサはしかし、伝統的な芸術をすべて素晴らしいと評価したわけではない。例えば歌舞伎については、「結局写実主義としぐさの模倣きりしかない、全くわれわれの劇のようなもの」と冷たい。それとは対照的に能は、「疑いもなく世界に誇る大芸術のひとつであり、恐らくは最も深遠なもののひとつ」であったわけである。

一方具体的には平田禿木の助けを得ながら、『道成寺』、『敦盛』、『俊寛』、『松風』など習った作品や鑑賞した作品について、熱心に記録を取り、解説を加え、さらには英訳を試みるようになった。最初に習得した『羽衣』などでは、スケッチを描いたり、旋律の一部を楽譜に書き写したりさえしている。なかでも「最も不可思議で繊細に美的な諸曲の中に『錦木』がある」として、特にこの作品については入念に調べたものと思われる。

明治 33 年に、再度フェノロサは帰国する。平田禿木の証言によると、その際彼は、梅若実の二人の息子、万三郎と六郎（後の二代目実）の舞台姿をカメラに収め、米国各地をま

わって能楽の講演を行い、多大の成功を収めたと言われる。その詳細に関してはほとんど何も知られていない現状であるが、ひょっとすると今後の研究によっては意外な「アメリカにおける能楽の受容史」が明らかになるのかもしれない。

1908年にフェノロサがロンドンで客死した時点において、彼の能に関する著述や英訳は未発表のまま残されていた。それを未亡人からそっくり受け取って、まとめ上げる仕事を引き受けたのが、イマジズムの主導者として知られるエズラ W. L. パウンドであったことには、すでに触れた。ロンドンのソーホー地区を根拠地として起こった反ロマン主義の自由詩運動は、アイダホ生まれのパウンドによって1912年正式に、イマジズムとして発足した。説明的な叙述を排して、イメージを重んじるというこの運動の原則は、主題を直接扱うこと、提示に役立たない言葉をすべて省くこと、従来の韻律に囚われずに自由な音楽的フレーズで詩を書くこと、の3つであったという。そのような原則にもとづくパウンドの理想は、まさに能楽の本質と一致した。そこで彼はさっそくフェノロサが残した著述の整理に取りかかるが、それは彼自身が「故フェノロサ氏の遺稿としてフェノロサ夫人の手に残されている極めて乱雑な草稿」と呼んでいるように、かなり不完全なものであったことが窺える。

パウンドとフェノロサの共訳として、まず『錦木』と『杜若』が1914年5月に発表され、半年後に『羽衣』が出版された。さらに次の年、『熊坂』など3曲を発表した後、1916年には共著という形で、フェノロサの著作の一部と『葵上』など約10曲の訳を含む著書 Noh' or Accomplishment: A Study of the Classical Stage of Japan が出版されている。

ところでフェノロサが「最も不可思議で繊細に美的な」と表現し、パウンドが最初に翻訳を手がけた『錦木』という能は、どのような作品なのであろうか。ここで一応その内容を説明しておこう。まず作者は、能楽の完成者として知られる世阿弥である。また作品の構成は、世阿弥が得意とした夢幻能の形式をとる。その夢幻能は通常前後二場に分かれ、物語の聞き手の役（ワキと呼ぶ）である旅人が、超現実的性格を持つ主人公（シテ）から話を聞く、という形をとる。主人公は前場では里人などの、現実の人間の姿に化身して現れ、旅人の問いに答え、後場では本来の姿を顕して、主人公の気持ちを語り、舞う。登場人物が二人以上の場合は、性格的に主人公側に属する役をツレと呼び、聞き手側にまわる役をワキヅレと称する。シテとツレは超現実的性格を表すためにも面を着けるが、現実世界に属するワキ側は面を着けることはない。

また二つの場面の間では狂言が、本物の里人の立場から物語のあらましを語って聞かせるが、これはひとつにはその間にシテが後場にそなえて着替えたり、面を替えて心を整えたりする時間稼ぎにもなっている。つまり聴衆は同じ物語を、まずワキの問いに対するシテの答えという形で、次に間狂言の語りによって、そして最後に主人公自身の表現を通して、それぞれ異なる立場から三度聞くことになる。

『錦木』では、曲の開始に先立って、人を葬った塚を示す簡単な作り物が舞台正面の奥に用意される。次にまず楽人たちが左手の橋懸かりを通して、正面の松の絵の前に右から

笛、小鼓、大鼓、太鼓の順番で着座すると、その間に右手の切戸口から八人から成る地謡が現れ、指定の位置に座る。ここでいよいよワキ役の登場となり、従僧を伴って諸国一見の僧が、「げにや聞きても信夫山、その通い路を尋ねん」と現れ、名乗りをあげた後、「陸奥の果てまでも修行せばや」と旅の情景を語りながら舞台の上を巡り歩いた後、「狭布の里にも着きにけり」と右手に座る。

するとそこに、夫婦と思しい男女が現れる。女は鳥の羽で織った布を、男は美しく彩り飾った木を手をしている。不審に思って尋ねると、それはそれぞれ細布、錦木と呼ばれる土地の名物であるという。さらに男は、錦木を恋する女の家門に立てるのがこの土地の慣わしで、女にその気があれば取り入れ、無ければ取り入れない。ある時三年かかって千本の錦木を立て続けた男が居たが、今は錦塚という塚に葬られていると語る。それではその塚を訪ねてみようという僧たちを夫婦は先に立って案内し、「嵐木枯村時雨、露分けかねて足引きの、山の常陰も物寂び、(中略)狐栖むなる塚の草、もみじ葉染めて錦塚はこれぞ」と言いながら、その中に入ってしまう。

そこに本物の里人がやって来て、この土地の慣わしで男女の仲立ちに錦木を思う女の門に立てるが、ある時千夜続けて立てた男が居た。ところが女が見向きもしなかったので、恋煩いの末に空しくなってしまった。それを聞いた女も、あわれに思って同じく空しくなってしまった。あまりにも不憫なので、二人を千本の錦木と共に葬ったのがこの錦塚である、と説明をして下がる。

話を聞いて哀れに思った僧たちは、二人の菩提を弔おうと祈り始める。するとまず細布を持った女が現れ礼を述べ、続いて男が錦木を持って塚の中から姿を現す。そして僧たちに向かって、「昔の姿をお見せしましょう」と言うなり、

女は塚の内に入りて  
 秋の心も細布の  
 機物を立てて機を織れば  
 夫は錦木取り持ちて  
 さしたる門をたたけども  
 内より答うることもなく  
 ひそかに音するものとは  
 機物の音

と謡い、ついには「千度になりぬればいたずらに、われも門辺に立ち居り、錦木と共に朽ちぬべき」と涙を流すが、やがて突然「嬉しやな、今宵あうむのさかづきの、雪を廻らす舞の袖かな」と舞い始め、男の思いがやっとあの世で受け入れられたことを示すのである。

このような能の場面を、パウンド自身は実際には見てはいない。彼の能に関する知識は、主としてフェノロサの遺稿を通してであった。出来上がった訳が、原作の内容を忠実に翻

訳しているとは必ずしも言えないのも、ひとつには能楽についてのパウンドの理解が十分でなかったため、と考えるとよいのかもしれない。しかし一方では、まさにそれがため、パウンドの訳は原作とは異なる、しかし欧米人の感覚からはより受け入れ易い、独特の世界を生み出すこととなった。例えば男が「嬉しやな」と一変して喜びの言葉を謡うところは次のようになる。

Happy at last and well-starred,  
Now comes the eve of betrothal;  
We meet for the wine-cup.  
How glorious the sleeves of the dance,  
That are like snow-whirls!

パウンドが完成したフェノロサの能の英訳を、最初に読んだひとりがアイルランドの民族主義的詩人ウィリアム・バトラー・イエーツ William Butler Yeats (1865–1939) であった。実はこの頃、パウンドとイエーツは極めて親しい関係にあった。後者は前者の独創性を高く評価して、1914年に自分が受け取った賞金を、前者に贈ったほどである。しかもその理由が、「同君のなしてきた文学事業は過ちだらけでないとも限らない。しかし自分の考えでは、無気力な伝統よりも、むしろ壮大な過ちにこそ月桂冠を与えるべきだと信じる」というユニークなものだった。

イエーツ自身はそれまで能について全く無知であったが、パウンドの草稿を見て、初めてその存在を知り、そこに秘められた特異な表現の可能性に気づく。中でも注目したのが『羽衣』と『錦木』で、いずれもアイルランド伝説との相似性が強いと説く。前者は普遍的な白鳥伝説を連想させるが、後者については、「[錦木の] 亡霊の愛人たちは、死んでから牧師の許へ来て、結婚の許しを求めるアラン [アイルランド西部の諸島] の若い男女を私に思い出させる」と述べている。そしてさらには、「この伝説を創った人たちは、ギリシャ人やローマ人よりも、またシェイクスピアやコルネーユよりも、われわれに近いのだ。彼等の情感は自意識的であり、回想的」であるとさえ言っている。

アイルランド人としてのイエーツの民族意識に関しては、いまさら述べるまでもない。この時代、アイルランドはいまだにイギリスの支配下であり、独立運動の真っ只中であつた。すでに19世紀末までには、イエーツ、グレゴリー夫人、シングらによるアイルランド文芸復興運動が盛んとなり、遂に第一次世界大戦中の1916年4月には共和主義者による武装蜂起が起こった。世に言うイースター蜂起である。二千人に近い義勇軍はダブリン市の中心部を占拠し、中央郵便局を根拠地として、4月24日臨時政府樹立の宣言を行った。これに対してイギリス政府は二万の軍勢を差し向け、月末までには義勇軍を壊滅してしまうこととなる。さらに紆余曲折を経て、イギリス帝国の自治領としてアイルランド自由国が成立するのは、1922年のことであつた。

新しい表現の可能性に触発されたイェーツは、1917年から1920年にかけて四つの舞踊劇を書き上げ、それらを Four Plays for Dancers として1921年マクミラン社から出版する。それらの劇のうち、“At the Hawk’s Well,” “The Only Jealousy of Emer,” “The Dreaming of the Bones”の三作は、アイルランドの伝説に素材を求めている。四番目の“Calvary”は、十字架につけられたキリストの姿を描いたものである。

このうち特に有名なのが、日本では『鷹の井戸』として知られる最初の作品である。時はアイルランドの英雄時代、舞台には正面に衝立が立ててあるだけで、その前に太鼓と、銅鑼と、ツィターが置かれている。欧米の劇場でお馴染みの幕は無い。代わりに三人の楽人が劇の最初に、鷹の羽を暗示する模様のついた布を持ち出し、次のように歌いながら広げ、そして折りたたむ。

I call to the eye of the mind  
A well long choked up and dry  
and boughs long stripped by the wind.

楽人たちが後部に退いてそれぞれの楽器を取り上げると、その間に井戸守の少女が黒い衣に身を包み、井戸を示す四角い青布の傍らに佇む。彼らはいずれも顔を、面のように化粧している。

楽人たちが歌っている間に老人が、しばらく経って若者が現れる。彼らはいずれも面を着けている。若者は、自分はサルタムの子クーファーリンであると名乗り、不死の泉を探しに旅に出たと説明する。すると老人は、彼らのすぐ目の前にあるのがその泉で、老人自身も若い時からすでに数十年も水が湧くのを待ち続けているのであるという。実はその間にも何度か水は湧いたのだが、その度毎に泉を守る少女に鷹の精が乗り移り、見守る者の気をそらしてしまうのである。

老人がそのように物語っていると、少女は彼らの視線を感じて立ち上がり、衣を脱ぎ捨てて舞い始める。すると老人は眠ってしまう。若者は少女の舞に魅せられて、湧き出す水には目もくれず、少女のあとを追って退場する。やがて老人が目覚め、若者が戻って来てみると、水は既に湧いた後で、石と落ち葉は濡れていたが、水そのものは一滴も残っていない。結局若者は、失意の老人を残して、次なる挑戦を求めて去って行く。

アイルランド伝説における英雄クーファーリンは、言うならば日本の日本武尊のような存在で、イェーツの戯曲にはしばしば登場する。中でも『エマーの唯一度の嫉妬』と題された舞踊劇は、『鷹の井戸』の後日談とも呼ぶべき作品で、知らずに自分の息子を殺した後、海の波に挑戦して溺れたクーファーリンを、妻のエマーが何とか生き返らせようと、あえて夫の若い恋人を呼び寄せて協力を求める、という話である。女たちの微妙な対話もさることながら、クーファーリンの姿と魂が別々に登場したり、クライマックスでは効果的に面を着け替えたりと、ユニークな工夫が注目される。

後にアイルランド共和国の上院議員をも勤めたほどの愛国者であったイエーツが、ひとしおの思い入れを込めて書いたのは、恐らく第三の舞踊劇『枯骨の夢』だったのではあるまいか。この作品を真に理解するためには、この作品が書かれる三年前に起こったイースター蜂起と、12世紀に起こったアイルランドへのノルマン進攻を心に留めておく必要があるだろう。

舞台の正面には、抽象的な山と空の絵が描かれている。今回用意された楽器は太鼓と、ツィターと、フルートである。『鷹の井戸』と同じく、三人の楽人は歌いながら布を広げ、再びたたむ。ただしそれがどのような布であるかに関しては、何の指示もない。

Why does my heart beat so?

Did not a shadow pass?

It passed but a moment ago.

続いて楽人たちは、周囲の情景を説明しながら歌う。夜明け前、月は雲に隠れ、コルコムローの大修道院に通じる丘の細道もすっかり闇に包まれている。そこにランタンを片手に、ひとりの若者がよろめきながらやって来る。その服装から察するところ、アランの漁夫らしい。

するとその前に見知らぬ男と、若い女が現れる。二人とも面を着け、昔の身なりをしているが、ランタンの火が消えてしまったので、若者には夜空に映る二つの影しか見えない。男が「ダブリンで戦ったのか」と尋ねると、若者は「郵便局に居た。もし見つかったら、壁の前に立たされて、射殺されてしまう」と答える。すると男は、「もし身を隠したいのならば案内しよう。この辺りの羊が通う道や隠れ場所は、すべて知っているから」と言って、先に立つ。

楽人たちが、「高く生い茂った草原の中を登り、刺だらけの茨の木や、古代の壁のすき間を通り」と、あたりの情景を説明しながら歌う間に、三人は舞台の上を回って歩く。やがて丘の頂上近くにたどり着くと、そこからは修道院の廃墟と、荒れ果てた墓地が見える。「昔は、夜明け前の祈りの時間を修道士たちに知らせる鐘の音が聞こえたものだった」と、男は回想する。さらに土地のいわれを尋ねる若者に向かって、「あの廃墟の祭壇の近くに、トムンドの王に背いて、若くして死んだ男が葬られている」と説明する。すると若者は、「私が死んだら、アイルランドの恥であるような男の墓からは、なるべく離れたところに葬って欲しい」と言う。

すると男に代わって、若い女が語り始める。戦ってそこに葬られたが、呪われていまだにその霊がさまよいつける男女の物語である。その物語は、若者との対話によって、次第にそのあらましがはっきりとして来る。男は恋する女と駆け落ちをする。怒り狂った夫は男と、恋人側に立った王を攻め、彼らを打ち負かしてしまう。窮地に立たされた男は恋する女のため、海の彼方から外国の援軍を連れて来る。そこまで聞いた若者は、思わず叫ぶ。

You speak of Diarmuid and Dervorgilla  
Who brought the Norman in?

そして若い女は答える。

Yes, yes I spoke  
Of that most miserable, most accused pair  
Who sold their country into slavery; and yet  
They were not wholly miserable and accused  
If somebody of their race at last would say,  
'I have forgiven them.'

だが若者は、憤然と言い放つ。

O, never, never  
Shall Diarmuid and Dervorgilla be forgiven.

しかし若い女は執拗に、「彼らを許す」と言ってくれと繰り返す。彼らの罪のため、恋人たちは七世紀の間、見つめ合うことは出来ても、口づけを交わすことは出来ないのである。やがて見知らぬ男と若い女は踊り始める。彼らは何度か見つめ合うが、口づけを交わすことはない。やがて彼らは岩から岩へと踊りながら、立ち込める雲の中に消えていく。安堵のため息を漏らしながら、若者は最後に思わずこう言葉を漏らす。

I had almost yielded and forgiven it all  
Terrible the temptation and the place!

『枯骨の夢』が、『錦木』に触発されて書かれたことはまず間違いあるまい。二つの作品の間には、あまりにも多くの共通点が見受けられることを、否定するわけにはいくまい。しかし一方では根本的なところで、両者は異なっていることも事実である。それはイエーツが、能の特異性に気づきながらも、自分では能を見たこともなく、また能の本質も十分に理解していなかったことによるのかも知れない。しかし結局はそれが幸いして、アイルランド文学に貢献するような、個性豊かな作品を生み出すこととなったのである。

参考文献

Fenollosa, Ernest, and Ezra Pound. *Noh' or Accomplishment: A Study of the Classical Stage of Japan*. London: Macmillan&Co.,1916.

Yeats, William Butler. *The Collected Plays*. London: Macmillan&Co.,1934.

古川久『欧米人の能楽研究』（東京女子大学学会研究叢書一）東京女子大学学会、1962年

Qamber, Akhtar. *Yeats and the Noh*. New York: Weatherhill,1974.

野上豊一郎（編）『能楽全書』東京創元社、1980年

増田正造、リチャード エマート他『英語能』（CD解説書：TECY-28010）テイチク、1990年

---

次の問題 (1-40) には、それぞれ a, b, c, d の答えが与えてあります。各問題につき、a, b, c, d のなかから、最も適切と思う答えを一つだけ選び、解答用カードの相当欄にあたる a, b, c, d のいずれかのわくのなかを黒くぬって、あなたの答えを示しなさい。

---

1. フェノロサとモースは、どのような関係であったと推察されるか。
  - a. 同郷人
  - b. 大学の同級生
  - c. 大学における研究上の先輩、後輩の関係
  - d. 恐らく同じ大学で知り合っただけの仲
  
2. フェノロサに関するパウンドの証言は、当時の日本の事情をどのように暗示しているか。
  - a. 人々は欧米の芸術に夢中になって、日本の伝統芸術には見向きもしなかった。
  - b. 人々は欧米の芸術を高く評価しながら、日本の新しい芸術のあるべき姿を模索していた。
  - c. 人々は欧米の芸術を高く評価する一方、日本の芸術の独自性を見出しつつあった。
  - d. 人々は欧米の芸術を、日本の伝統芸術以上に身近に感じるようになっていた。
  
3. フェノロサが再来日した時、彼に対して日本の社会は極めて冷たい態度を取った。その理由として適切なものは、次のどれか。
  - a. 日本の美術界において、欧米の影響力を排除するような体制が整っていたため。
  - b. 日本の美術界において、欧米から学ぶべきことを直接受け入れるような体制が、すでに整っていたため。
  - c. 日本の美術界は、欧米の影響を受けながらも、独自の体制を確立したものと、一般には考えられていたから。
  - d. 開校したばかりの東京美術学校が、フェノロサの来日によって動揺を来すと思ったから。

4. 「この 20 年来わたしは梅若実とその息子たちの個人教授の下で、謡いの方法や舞のことのなにかやらを実習によって学びつつ」という言葉が正確な事実とすれば、フェノロサが梅若門下に入門したのは、いつ頃のことと推測されるか。
  - a. フェノロサが、洋画を排斥する演説を行った頃。
  - b. フェノロサが、同志の人達と鑑画会を結成した頃。
  - c. フェノロサが、岡倉天心と欧米への旅に出たその少し前。
  - d. 東京美術学校が正式に発足した頃。
  
5. 梅若実に関して、誤りと思われるのは次のどれか。
  - a. ギリシャ悲劇に関しては無知であった。
  - b. 西洋のオペラと、日本の能の違いは、魂にあると考えていた。
  - c. 能の精神は、日本人以外にも理解して貰えると信じていた。
  - d. 能舞台では一心不乱に演技を続け、聴衆の反応には無頓着であった。
  
6. 梅若実によれば、能の長所として、ひとつだけ挙げるとすると、次のどれか。
  - a. 能面に見られる幽玄。
  - b. 情感に溢れる物語。
  - c. 純粋な心の表現。
  - d. 精神的表現としての舞。
  
7. フェノロサが、古代ギリシャ劇と能の共通点として挙げていないのは次のどれか。
  - a. 古風である。
  - b. 仮面を用いる。
  - c. 強烈で、美しい。
  - d. 楽器を用いる。
  
8. 能『高砂』は典型的な夢幻能で、旅の神官が高砂の浜で老夫婦に出会い、浜の老松の由来を説明してもらうが、実は彼らは神の化身である松の精であったという話である。後に説明される夢幻能の特徴から、能『高砂』においては起こらないと思われるのは次のどれか。
  - a. 神官はワキなので、面を着けない。
  - b. 劇の途中で、狂言役の船頭が登場する。
  - c. シテである松の精は、劇の前半と後半で異なる衣裳と面をつける。
  - d. 最後にシテは、ワキを誘って一緒に舞う。

9. フェノロサの歌舞伎についての評価は、次のどれか。
- 写実的ではあるが、欧米の戯曲には劣る。
  - 欧米の戯曲と同様に写実的なので、優れている。
  - 欧米の戯曲と同様に写実的なので、能に劣る。
  - 写実的なので、能や欧米の戯曲よりも劣る。
10. 世紀が変わった時点において、結局フェノロは何年日本に滞在したことになるか。
- 約 9 年
  - 約 11 年
  - 約 13 年
  - 約 15 年
11. エズラ W. L. パウンドのイマジズム運動の原則に反するのは次のどれか。
- 登場人物の詳細な紹介。
  - 幻想的な背景描写。
  - 印象的な心理描写。
  - 脚韻を無視した詩の構成。
12. パウンドが、自分がまとめたフェノロサの遺稿が「極めて乱雑な草稿」であったと述べていることは、何を暗示するか。
- フェノロサは初めから出版を意図しないで、草稿を書いた。
  - フェノロサにとって、草稿は大して重要なものではなかった。
  - フェノロサの草稿をまとめるために、パウンドはかなりの日月を要した。
  - まとめられた原稿には、パウンドの意図がかなり反映される結果となった。
13. 『錦木』の物語は、どの季節のものと推察されるか。
- 春
  - 夏
  - 秋
  - 冬
14. 『錦木』で夫婦が謡う「嵐木枯村時雨」の正しい読み方は、次のどれか。
- らんぼく、こそん、ときのあめ。
  - らんぼくかれて、むらにじう。
  - あらしに、きはかれ、むらときにあめ。
  - あらし、こがらし、むらしぐれ。

15. 『錦木』の男が、「千度になりぬればいたずらに」と謡った時の心境は、どのようなものであったと推察されるか。
- 「千度になったので、私もこのまま錦木のように、死ぬまで門辺に立っていよう。」
  - 「千度になったので、門辺に立てた錦木が朽ちるのを見届けよう。」
  - 「千度になったので、門辺を立ち退き、持ち帰った錦木と共に死のう。」
  - 「千度になってもう見込みは無いので、門辺で錦木を持ったまま自殺しよう。」
16. 『錦木』で、最終的に女があので男の求愛を受け入れたことが判るのは、どの時点においてか。
- 前場における夫婦の語り。
  - 間狂言における里人の説明。
  - 後場における女の口上。
  - 後場における男の舞。
17. パウンドの『錦木』の英訳において、原作には見られない補足的な説明がひとつある。それによって欧米の聴衆には内容が分かり易くなるが、それはどれか。
- Now comes the eve of betrothal;
  - We meet for the wine-cup.
  - How glorious the sleeves of the dance,
  - That are like snow whirls!
18. 自分が受け取った賞金をイエーツがパウンドに贈った理由として考えられることは、次のどれか。
- たとえ間違いだらけでも、伝統を打ち破るような新しい作品は高く評価できる。
  - 間違いだらけかも知れないが、無気力な伝統に基づいた作品よりはましだ。
  - たとえ間違いだらけでも、伝統に頼った無難な作よりも、個性的な力作を評価すべきだ。
  - 間違いだらけとは必ずしも言えないし、無気力な伝統以上に思い切った失敗を評価する。
19. イエーツが、「ギリシャ人やローマ人よりも、またシェークスピアやコルネーユよりも、われわれに近い」人たちと呼んだのは、誰のことか。
- 明治の日本人。
  - 古代の日本人。
  - 能の作者。
  - フェノロサと梅若実。

20. 「イースター蜂起」の名の由来は、次のどれか。
- 恐らく共和主義者の指導者の名による。
  - 義勇軍の多くがイースター島出身者であった。
  - 武装蜂起が起こったのがアイルランド東部のダブリンであった。
  - 武装蜂起が起こったのが復活節の最中であった。
21. イェーツの舞踊劇と能の間に見られる共通性は、どれか。
- 合唱の規模と役割。
  - 主役と脇役が明確に区別されていること。
  - 対話形式で物語が展開すること。
  - 面の使い方が同じであること。
22. イェーツが『鷹の井戸』において、能から取り入れなかった手法は、どれか。
- 舞台に用意された作り物。
  - ワキによる名乗り。
  - 間狂言による息抜き。
  - シテ側による舞。
23. 『鷹の井戸』は日本に逆輸入され、観世流では『鷹姫』という題で伝統的な能舞台で演じられた。その際シテは老人を、ワキは若者を演じたが、その理由として考えられるのはどれか。
- 老人の役は、若者の役よりも重要であるから。
  - 老人は霊界に属し、若者は現世に属すから。
  - 対話において、老人が語り手、若者は聞き手であるから。
  - 老人は常に舞台上で演技を続けるが、若者はあとから入って来て、途中で中座するから。
24. 『鷹姫』では、ツレが少女の役を演じた。この役をツレが演じることで、問題になることがあるとすれば、それは次のどれか。
- 少女が途中で退場すること。
  - 少女が舞を舞うこと。
  - 少女が劇中ひとことも語らないこと。
  - 問題になることは何もない。

25. 「クーパーリンは、言うならば日本の日本武尊のような存在」と言う説明で暗示されるように、両者の共通点が多いが、その共通点に含まれないのは次のどれか。
- a. 両者とも、若々しく、力強いイメージを持っている。
  - b. 両者とも、大勢の目の前で海に溺れた経験を持っている。
  - c. 両者とも、心から愛してくれる妻を持っている。
  - d. 両者とも、遠い昔の伝説の中の英雄である。
26. 『鷹の井戸』と『枯骨の夢』の冒頭の部分を比較して、正しいと考えられるのは次のどれか。
- a. 楽人たちが広げる布の様子は、一方は鷹の羽、もう一方は山と空である。
  - b. 楽人たちが受け持つ楽器の種類は同じである。
  - c. 楽人たちが歌い出す冒頭の3行は、同じ詩脚、同じ脚韻構造によっている。
  - d. 楽人たちが歌い出す冒頭の3行は、一方は情景描写、もう一方は心理描写である。

問いの27から39までは、『枯骨の夢』に関する設問であるので、そのことを念頭に入れて答えなさい。

27. 『枯骨の夢』は、いつ、何処で起こった物語という想定か。
- a. 12世紀の昔、アイルランド西部のどこかで。
  - b. 12世紀の昔、北アイルランドで。
  - c. 1916年、アイルランド西部のどこかで。
  - d. 1916年、北アイルランドで。
28. 『枯骨の夢』で最初に登場する若者の正体は、次のどれか。
- a. 漁から帰る途中のアラン島の漁夫。
  - b. コルコムロー大修道院に帰る途中の修道士。
  - c. ダブリンから逃げてきた脱獄囚。
  - d. イースター蜂起で戦った義勇軍のメンバー。
29. 見知らぬ男と若い女の正体として考えられるのは、どれか。
- a. 死んでから結婚の許しを求めに牧師を訪ねたアラン島の若い男女。
  - b. その昔、ノルマン人と戦った若い戦士とその恋人の亡霊。
  - c. その昔、私欲のためにアイルランドを裏切った男とその恋人の亡霊。
  - d. その昔、トムンドの王を裏切って死んだ男とその妻の亡霊。

30. 見知らぬ男が過去の亡霊であることが聴衆に判るのは、次のどの台詞によってか。
- 「ダブリンで戦ったのか。」
  - 「このあたりの羊が通う道や隠れ場所は、すべて知っている。」
  - 「昔は、夜明け前の祈りの時間を修道士たちに知らせる鐘の音が聞こえたものだった。」
  - 「あの廃墟の祭壇の近くに、トムンドの王に背いて、若くして死んだ男が葬られている。」
31. 「私が死んだら、アイルランドの恥であるような男の墓からは、なるべく離れたところに葬って欲しい」という若者の言葉から推察出来るのは、どのようなことか。
- トムンドの王に背くということは、アイルランドの愛国者であるということ。
  - 若者自身が、熱烈なアイルランドの愛国者であるということ。
  - 若者は、自分はもう助からないと死を覚悟していること。
  - 若者は、実は極度の臆病者であるということ。
32. 見知らぬ男と若い女が若者の前に現れたのは、なぜか。
- 若者が、アイルランド人であったから。
  - 若者が、アラン島の漁師であったから。
  - 若者が、熱烈な愛国者であったから。
  - 若者が、追われて困っていたから。
33. 見知らぬ男と若い女が現れた目的は、何か。
- 若者を、かくまうため。
  - 若者に、物語を聞いて貰いたかったから。
  - 若者に、ひと言「許す」と言って貰いたかったから。
  - 若者を、死の国へと案内するため。
34. 見知らぬ男と若い女が消えていった後、若者が安堵のため息を漏らしたのは何故か。
- 亡霊たちが、やっと立ち去ったから。
  - 死の国へ、引きずり込まれずに済んだと思ったから。
  - やっと男女の正体を推察することが出来たから。
  - 最後まで、「許す」という言葉を口にしないで済んだから。

35. 若者が最後に漏らした“the temptation”という言葉の意味は、次のどれか。
- 亡霊たちによる死の使いの招き。
  - 亡霊たちの後を追いたいという誘惑。
  - 亡霊たちを救いたいという衝動。
  - 亡霊たちの踊りに加わりたいと思う気持ち。
36. イェーツが『枯骨の夢』を書いた時、特に彼の心を捕らえていた歴史的な事件は次のうちのどれか。
- 1014年、マンスター（アイルランド西部）の王ブライアンボルルーがバイキングの侵入を排撃したクロンターフの戦役。
  - 12世紀の中頃、アイルランド各地の紛争において、レンスター（アイルランド東部）の王ダーマット・マクマローがイギリス王ヘンリー2世に援軍を求めたこと。
  - ダーマット・マクマローの要請に応えたヘンリー2世が、アングロ・ノルマン軍をアイルランドに派遣したこと。
  - 1171年、ヘンリー2世自身がアイルランドに赴き、アングロ・ノルマンの貴族とアイルランドの指導者たちに忠誠を誓わせたこと。
37. 『枯骨の夢』において、イェーツが忠実に能の慣習に従ったのは、次のどれか。
- 見知らぬ男と若い女には面を着けさせたが、若者には着けさせなかったこと。
  - 笛と打楽器という楽器の組み合わせを守ったこと。
  - 舞台装置を省くかわりに、合唱にあたり的情景を説明させたこと。
  - 劇の最初と終わりで、合唱に歌わせて、全体の構成をしっかりとまとめたこと。
38. 『枯骨の夢』と『錦木』の間に見られる共通の特徴ではないのは、次のどれか。
- 主人公が、恋人たちの亡霊であること。
  - 最終的には、恋人たちがめでたく結ばれること。
  - 現世の人間が、亡霊に尋ねるという形で物語の筋が次第に明らかとなること。
  - 舞台の上を回ることによって、場面の移動を表現していること。
39. もしも『枯骨の夢』を本格的な能に翻案するとすると、配役はどのようになるか。
- 若い女がシテ、見知らぬ男がツレ、若者がワキ。
  - 若者がシテ、若い女がワキ、見知らぬ男がワキツレ。
  - 若者がシテ、見知らぬ男がワキ、若い女がワキツレ。
  - 見知らぬ男がシテ、若い女がツレ、若者がワキ。

40. この論文の趣旨を簡単に述べるとしたら、次のどれが一番適切か。
- a. 欧米においても、能は百年以上も前から受容されていた。
  - b. 英語能におけるフェノロサの功績は、極めて大きい。
  - c. イェーツの舞踊劇は、能の影響による果実である。
  - d. 英文学における能の影響を、軽視してはならない。